
陽炎の狩人 ~ F.M.N. ~

俊鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陽炎の狩人（F・M・N）

【Nコード】

N0004R

【作者名】

俊鴉

【あらすじ】

山道を征くハンターが一人。彼は雷狼竜の急襲に遭い、辺境の温泉集落「ユクモ村」にたどり着く。そこで彼を待つ運命とは。

【オリジナルキャラのモンハン小説。MHP3のユクモ村が舞台で、前作「闇色の陽炎」の続編になります。前作ベースで話が進むので、「闇色の陽炎」を読んでおくと話についていきやすいかもです。ちなみにサブタイトルの「F・M・N」の意味はまだ秘密です】

かれこれ30分も飽きずに口ずさんでいた歌を、ガーグアの上のアイルーがピタリと止めた。

男がほんの少し、顔を上げる。

「……そろそろ雨が降ってきそうだな。ハンターさん、大丈夫かニヤ？」

「わかるのか？」

「ヒゲで分かるのニヤ！ アイルー族のヒゲは万能なんだニヤ！」

そう言っただけでアイルーはご自慢の長いヒゲを自慢気にピクピクさせた。ハンターと呼ばれた男はまたもう少し顔を上げ、空の様子をつかがう。

白い霧の向こうに透ける空は確かに曇っていて、アイルーの言う通りいつ降りだしてもおかしくないだろう。

「……クエストは雨天決行だからな。濡れるのは慣れてるさ」

「その包みは濡れても大丈夫ニヤ？ 大事ニヤ物みただけど」

男はふ、と微かに笑った。

「……もう何度も”濡らされてる”が問題なかったよ」

「そうニヤ？ ならいいニヤ。せいぜい風邪を引かニヤいように気をつけるニヤ」

「寒いのは慣れててね」

「ニヤ？ 北方の出身ニヤ？」

「いや……ただ、雪山で狩りをする事が多かっただけだ」

「ニヤー、雪山は行ったことないニヤー。寒いのは苦手だニヤー」

「お前こそ大丈夫なのか？ 雨具も無しみたいだが」

「アイルー族の毛皮は万能なんだニヤ！」

「そうか、それは心強いな」

ハンターはまた微かに笑い、視線を道の横に移した。

道の左側は切り立った溪谷になっていて、奇妙なほどに長細い岩山がいくつも突き立っている。

白い霧の合間に、ふといくつつかの楼閣のような影が見えた。

温泉の多いこの地方ではよく見る、湯治場を持つ小さな集落だろう。

「……降ってきたニヤ」

アイルーの言葉通り、頭上をも覆う霧を突き抜けて、冷たい雨粒が男の笠にも落ちてきた。

ポツ、と音を立てる。

その音は瞬く間に連続し、ポツポツからシトシトへ、そしてすぐにバケツをひっくり返したような大雨になった。

荷車が小石を蹴立てて走る道の右側、山の斜面からは小さな滝のよ
うな流れがいくつも飛沫をあげている。

「ニヤー、これは予想外だニヤー」

アイルーはそう言いながら時折プルプルと頭を振り、顔についた雨粒を払う。

男は先ほどと変わらず、包みを抱えてただじつと荷台に座っていた。

空が紫電に光ったかと思うと、少し遅れて雷鳴が轟く。

雨はまだまだ強くなりそうだ。

「この地方はよくこういう雨が降るニヤ。そんなに長い時間は降らないはずニヤ」

「……なあ」

「もう少し行ったら洞窟があるからそこで雨宿りするニヤー。ヒゲが濡れ……ニヤ？どうしたニヤ？」

「この地方の雷光虫は……雨でも飛ぶものなのか？」

男の言葉に、アイルーはガーグアのスピードを緩める。

今まで高速で走っていたから気がつかなかったのか、雨と霧でけぶる山道に異常とも言える光景が広がっていた。

無数の雷光虫が、青白い光を放ちながら空中を漂っているのだ。

晴れた夜なら幻想的とも言える風景なのだろうが、霧と豪雨の中では不気味としか言いようがない。

虫は、雨の中では飛ばないのだから。

「珍しいな。俺の前いた地方でも雷光虫は雨の日は飛ばなかったんだが」

「……ここもニヤ」

「え？」

「この雷光虫も雨の日は飛ばないニヤ」

「ならどうして……」

「急ぐニヤ!!」

そう言ったかと思うと、アイルーはいきなりガーグアの腹を蹴り、フルスピードで車を走らせ始める。

「おいおい、そんなに急がなくても……」

「理由はあとで話すニヤ!! とにかく急ぐニヤ!!」

猛スピードで雨中を飛ばす車。

道に漂う雷光虫の数は増える一方。

そしてその青白い光の群れに、動きが現れ始めた。

一方向を目指してゆっくりと移動しているのだ。

否、その動きは吸い寄せられていると言ったほうがしっくりくるか。

とにかく、無数の雷光虫が山の斜面を登るようにふわふわと移動していく。

「まずいニヤー!! まずいニヤー!!」

「お、おい! 一体どうしたんだ!？」

「“アイツ”が来るニヤー!!」

「……アイツ?」

男が顔を上げて雷光虫達の行先を見ようとしたその時、目も眩むような光が霧と雨を貫いた。

至近距離の落雷。

しかしそれだけじゃない。

男は確かに聴いた。

モンスターの咆哮を。

「まずいニャー!! 逃げるニャー!!」

半泣きでガーグアの腹を蹴り続けるアイルーと、狂ったように道を走り続けるガーグア。

「……………」

揺れる荷台の上で、一人男だけは冷静に次の行動を取る。

包みの布が取り払われた。

冷たく光る、大剣の刃。

刃の根には8連装シリンダー。

雨に打たれ、獰猛な飛竜の牙のように刃が光っている。

「…………俺もお前も、濡れるのには慣れてるからな」

雨にも、血にも。

男は呟き、二度目の咆哮を聞いた。

雷光を纏うその主を頭上に捉え。

1 急襲者

疾走する車の揺れを物ともせず、男は立ち上がった。

手にした大剣は細身だが、磨きこまれた鏡のような輝きを放っている。

柄と刃の間には機械機構。

「ニヤ！？ ハンターさんなにしてるニヤ！？ あぶないニヤ！！
座ってるニヤー！！」

「“アイツ”、俺たち狙ってるぞ」

「だから逃げてるんだニヤッー！！」

「悪いな。逃げるのは嫌いなんだよ」

逃げたりなんかしない。

失ってからじゃ遅いから。

常に追い求め、常に攻める。

「そうしないと……」

肩に刀身を預け、身を縮める。

“アイツ”も、同じように。

「守れないからな!!」

バネのように縮めた体の力を使い、男は荷台からバク転した。

同時に、岩山から雷光を纏ったモンスターが荷台に跳びかかる。

男が着地したと同時に、ガーグアの曳く荷台が粉碎された。

轟音、咆哮。

そこには四足歩行のモンスターがいた。

鈍く輝く青い鱗に、鋭いシルエットを持つ黄色い甲殻。

白いたてがみは逆立ち、雷光をまとっている。

強靭な発達をみせている四肢の先には、岩にも食い込む鋼のような爪。

そして天を衝くように伸びる双角。

(なんだコイツは……?)

見たことのないモンスター。

そして圧倒的ともいえる威圧感。

徐々に味わう緊張感に、男の目付きは険しく、鋭くなる。

(車は……逃げれたか)

アイルーとガーグアは無事なようで、ガーグアいう鳴き声とニャーニャーという声は、謎のモンスターを挟んで道の向こうへ遠ざかっていった。

モンスターはそれを横目でチラリと見、ゆっくりとこちらに振り返った。

薄暗く、雨の降りしきる山道で、その目は妖しい青色に光り輝く。

雷鳴が轟き、咆哮一発。

敵は突然動いた。

その丸太のような前腕がいきなり頭上に振り上げられ、高速で男に振り下ろされる。

「っ!!」

すんでのところで、横っ飛びでかわす。

地面がえぐられ、土と水が飛散る。

アレをまともに喰らえばタダでは済まなさそうだ。

しかし男が態勢を立て直す前に第二撃。

次は左腕が振り上げられ、男に叩きつけられようとする。

「ふっ!!」

男は反射的な前転で敵の懐に潜り込み、辛くも一撃を回避。

「つつ!!」

その瞬間、全身に針で刺されたような痛みが男に突き刺さる。

体中の毛が逆立ち、視界がわずかに明滅した。

(なんて電圧だ!?)

触れたわけでもないのに強烈に感電するほどの電気。

いくら雷光虫を侍らせているからと言ってもこれは尋常じゃない。

(防具も付けずに挑む相手じゃないな、コイツは……)

それでも退かない男は、手にした大剣を思い切り振り上げた。

確かな手応えに、胸の付近の体毛がパラパラと散る。

「はっ!! あんだけ猛って吠えててもこんな程度か!」

振り上げた大剣の勢いをそのままに、今度は横殴りに足を斬りつける。

モンスターが低く唸って飛び退いた。

間髪入れず、追撃。

大剣を引きずるように後ろに構え、唸るモンスターに接近。
細い山道だ。

両者ともに左右への回避は不可能。

「はああああああつ！！」

振り上げられる大剣。

顔面にヒットする軌道のソレを、モンスターは仰け反ってかわす。

切っ先がモンスターの左目を掠めた。

目を傷つけられたモンスターが叫んだ。

男は構わずに次撃に移行。

振り上げた勢いを利用して体を一回転させ、今度は右上段からの袈裟斬り。

今度はモンスターの右腕の甲殻で受け止められる。

「くっ！」

甲殻にめり込んだ刃を引き抜くと同時、男はそのままモンスターの強烈な一撃を食らった。

咄嗟に大剣でガードしたおかげで直撃は避けたものの、そのまま吹き飛ばされる。

「ブロス種並のパワーだな……」

受身をとってすぐに男は立ち上げる。

モンスターの追撃は無かった。

その代わりに、不思議な行動をとっている。

何やら首を振り、背中を発光させているのだ。

明らかに大きな攻撃の準備をしている。

本能が、警鐘を鳴らす。

「……その前に怯ませる!!」

男は走った。

泥を跳ね除け、雨の中を走った。

モンスターの発光が強まる。

距離数メートル。

攻撃可能圏内。

「ああああああっ!!」

乾坤一擲、男は跳ぶ。

万鈞の大剣を振り上げ、敵の双角に一撃を与えようと。

そして、その刃が振り下ろされると同時にモンスターが一際大きく吼えた。

刹那、曇色の天から喚ばれる力。

落雷。

本来、モンスターに降り注がれるべきその力は、モンスターの角よりわずかに高い位置にあった大剣に導かれた。

その切っ先に。

一瞬走る、脳が焼き尽くされるような痛みと衝撃。

男の意識は途切れた。

相対し、睨み合うモンスターの顔をその眼に焼き付けて。

2 独りノ夢

夢を見ていた。

どこかの村の、どこかの家。

俺は誰かに手を振る。

誰だろう、彼らは遠くにいるし、視界がぼやけて分らない。

明滅。

次に映ったのはまたどこかの村。

一面、黒い。

人はいない。

どこだろう、分らない。

明滅。

次はもっと大きな街。

大通り。

出店がたくさんある。

遠くに高い塔が見える。

幾本も、青空に向かって立っている。

呼ばれた気がして振り向いた。

誰もいなかった。

次は何かの店。

店内には武器が所狭しと。

カウンターの上に大剣が一振り。

カウンターの向こうには誰もいなかった。

どこかの廃墟。

壊れた家がいくつも。

焼け焦げた跡も。

振り返ると老年の女性が一人。

誰だろう、知らない。

冬の針葉樹林を歩いている。

一人。

飛竜が追ってくる。

逃げている。

一人。

砲声がした。

周りを見回す。

誰もいなかった。

大きな橋の上。

橋の上には自分一人。

川上から何かがやって来た。

ヒレが見える。

巨大な魚竜。

大剣を構えた。

最後は雪山。

夜、吹雪。

一人。

黒い飛竜。

黒い剣。

炎。

朝陽。

一人。

どれも知らない。

誰もいない。

俺は一人だった。

独りだった。

誰もいなかった。

俺は独りだった。

一人で戦ってきた。

独りで生きてきた。

……本当に？

誰もいなかった。

……誓って？

一人だった。

どこかの森。

崖。

空。

風。

紙切れ。

大剣。

花束。

赤い、花束。

真っ赤な、花束。

呼ばれた気がした。

誰？

知らない。

俺は。

一人。

独り。

また呼ばれた。

俺は耳を塞いだ。

皆、去った。

もう独りは嫌で、一人を選んだ。

それでも誰かが俺を呼ぶ。

はっきりと。

俺の中に居続ける誰かが。

俺の名を。

呼ぶ。

『……レイウンちゃん』

俺は目を覚ました。

3 ボク

明るい。

しかし突き刺すような明るさではない。

柔らかな陽の光。

男が始めに認識したのは天井だった。

細いがしつかりとした長い梁が十字に架けられ、頭上には赤布の天蓋が張ってある。

次に匂い。

木の匂いに交じる微かな硫黄の臭気。

ここにくる途中に山道で嗅いだことのある匂いだ。

……ここ？

男は微睡む頭でぼんやりと考える。

(ここは……どこだ?)

山道で謎のモンスターに襲われて、反撃して、それで？

男の記憶はそこでぶつつりと切れていた。

まあ、少なくともここは山道のご真ん中ではないだろう。
ならばどこだ。

天国とか？

(いやに現実感溢れる天国だな)

男はふふ、と笑って突飛な考えを捨てた。

自分はどうやらベッドに横たわっているらしい。

(体は動くかな……)

手を動かす。

問題なく動いた。

で、動かした手が何かに触れた。

布団？

いや、布の感触じゃない。

なんだろう。

こう、ぶにぶににしてて、もちもちしてて、まるでほら、人の肌みたいな。

「んん……？」

そこで男は初めて気が付いた。

隣で誰かがもう一人、寝息をたてている。

まだ醒め切っていない頭では事態を把握できかねる。

百聞は一見に如かず。

男は頭をくるりと回して横を見た。

「すー……すー……んにゃ……」

女の子が一人、熟睡中。

毛布で隠れてはいるが、見たところ少なくとも上半身は下着一つ付けていない。

いや、これはあれだ。

実は男でした、というオチだろう。

俺は騙されないぞ。

髪も短いし。

などと男は無理やり結論を出した。

それにあれだ、いちいちこんなことで俺は興奮とかしないからな。

クールに、クールに。

「すー……す……ん、にゃ？」

(そのアイルーみたいなのはどうにかならないのか、少年)

男に添い寝する女(男の子?)がうつすらと目を開けた。

男の顔を認めてはいるが、意識の8割は夢の中に残していそうな寝ぼけ眼。

「んん〜……? あ、おはよー……?」

とりあえず、起きたら挨拶できる礼儀正しい子なのは分かった。

声は……いや、高い声の男だろう。

正直、裸の男に添い寝されているというのも、あまりいただけない状況ではあるのだが。

「んにゃ……お・は・よ」

「お、おはよう」

「んんーっ……」

男の返事を聞くと、満足そうに両手を伸ばし、伸びをする隣人。

抑えられていた毛布がはだけた。

絹のように極め細やかな肌。

そして控えめだが確かにある“主張”。

「……一応、最終確認を行う」

「にゃ？ なーにー？」

「キミは男だな？」

「女の子だよー？ むにゃ」

「……」

「？」

「あのな……」

「……んー、顔真つ赤だよ？ 熱でもあるのー？」

「服くらい着て寝ろー！！」

「にゃにゃーっ！？」

「いやー、ごめんねー。ホントはボクは床に布団敷いて寝るつもりだったんだけど、つい癖でベッドに潜り込んでしまったさー」

添い寝していた女の子が服を着込んで奥から現れた。

猫っ毛の黒いショートヘアに、褐色の瞳。

あの状況なら普通は女の子が、きゃーとか言うもんだろくに、何事もなかったかのように笑っている。

「ほら、この辺り温泉のおかげであつたかいから、ついついいつもみたいに裸で寝ちゃってー」

「……………」

「どーしたのー?」

「いや、どういふ反応すればいいのか困ってる」

「?」

不思議そうな顔で、女の子はベッドに腰掛ける俺の隣に座る。

不思議そうな顔をしたのはこっちなんだが……

「まあいいや……それで、ここはどこなんだ?」

「ここ? ここはユクモ村なのだ。なんか山道に転がってるハンターさんがいたから親切にも拾ってきてあげたんだよー」

「……俺?」

「そーそー。なんであんなところに転がってたのだ?」

「俺は……モンスターに襲われた」

「ジャギイとか?」

「ジャギイ?」

「二本足でー、手がちっちゃくてー、エリマキがあつてー、ぎゃあぎゃあ鳴くやつ」

「いや、雷光虫を周りに侍らせてる、青と黄色の……」

「あちゃー、そりゃハンターさん、運が悪かったのだ」

「?」

「もしかして雷ばーんって落とすやつじゃなかった？」

「そう、そいつ」

「それはね、ジンオウガっていうんだ」

「ジン、オウガ？」

「うん、この辺で最近見るようになったモンスターでね。別名、雷狼竜」

「雷狼竜……」

「ボクもこの村に来る時に遭ったんだけど、怖かったなー」

「どうやら一筋縄ではいかない大型の獣竜のようだ。」

「たしかにあの威圧感はタダモノでは無かった。」

「そういえば、キミはこの村のハンターなのか？」

「うん。あ、自己紹介がまだだったね。ボクの名前はサキ。サキ〓カナズラ。こう見えてもハンターなのだ！ハンターさんの名前は？」

「俺は……レイヴンだ。レイヴン〓ウォルク」

「そっか。じゃあレイヴンさんだね！」

その瞬間、男、レイヴンの頭にチクリと痛みが走った。

『レイヴンさん』

(なんだ……この感じ)

「……レイヴンでいい」

「でもボク、たぶん年下だよ？」

「……いいよ気にしなくて」

あの呼び方をされると、何故か心が刺されるような痛みが走るのだ。

不快な訳ではないが、なにか心に引っ掛るし、なにより本能が避けている。

そつだ、今まで見ていた夢でも……

「あつ！」

と、しばらく不思議そうな顔をしていたサキがいきなり声を上げた。

「そついえばハンターさんが起きたら村長さんに知らせなくちゃいけないかったんだっけ！」

「ああ、この村の村長か」

「うん、ほら、早く行こう！……」

「あ、ああ」

サキに手を引かれて立ちあがる。

何か重要なことを思い出せないまま。

黒火竜が雪山の夜に葬られたあの日から月日は流れ、およそ二年後、
辺境のユクモ村に一人のハンターが運びこまれる。

“漆黒の衝風”・レイヴンⅡウォルク。

彼はこの地で何を得るのか。

何を失うのか。

4 ユクモ村

暖簾のかかった入り口から外に出ると、暖かな陽光に照らされた。

村は斜面に作られていて、最上部には四層ほどに階の積まれた楼閣のような建物がそびえ立っている。

ところどころある換気口からはもうもうと湯気が吐き出されていた。

「あれはねー、温泉なんだよー!!」

隣の女の子、サキが自慢気に建物を指す。

「温泉？」

「うん、ユクモ村はこの辺の村の中でも一番大きい温泉を持ってるんだよ」

この地方は巨大な泉脈があることから、温泉を持つ集落がいくつが存在している。

それを目的とした湯治客も多く、それらの温泉を巡るツアーのようなものもあると聞いていた。

しかし少し残念そうな顔でサキは続けた。

「でもね、最近は温泉に入りに来る人も少なくなってきたんだ……」

「どっして?」

「ほら、レイヴンも遭ったジンオウガ。アイツらが山奥からこつち側に下りてきてるのだ。昔は霊峰っていう、もっともーっと山奥にしかいなかったのに」

まあ、たしかにあんなのがしょっちゅう山道をうろろしているよ
うじゃ湯治客の足も遠のくというものだろう。

確かに、付近で最大の温泉を持っている割に村に湯治客は少なく、
閑散としている。

「そこでボクみたいに外からハンターを呼ぶことも多いのだ」

「ん? サキは招聘ハンターだったのか」

招聘ハンターとは、なにかしらの獣害や竜害を被っている村などが、
それらの解決のために要請するハンターである。

害をなすモンスターの強さにもよるが、大体は上位ハンターやG級
ハンターなどの高いハンターランクのハンターが呼ばれる。

(この少女がそんなハンターとは、人は見かけによらないもんだな
……)

「え? しょーへーはんたー?」

「……違つのか?」

「ボクはモミジイが「最近雷狼竜が多くてかなわん」ってぼやい

てだからユクモ村の来たのだ」

「モミジイ？」

「む……こうなったら村長に報告する前にユクモ村を全部案内するのだ！ ついてきて〜！」

「え？ あ、おい、引っ張るなって〜！」

村の最下部、この村の入り口である門と石段。

そこに腰掛けて広がる山々をぼっーと見つめる青年を、サキはビシッと指さした。

「まずこの人は、仕事をサボって村の門番とか言ってる親のスネかじりなのだ！」

「お、おいおい、サキちゃん、それはあんまりな言い方じゃ……」
名誉毀損な紹介に、件の青年がうろたえる。

彼はサキの隣のレイヴンに気が付くと、驚いた顔をした。

「おう、アンタ目が覚めたのか！」

「あ、ああ」

「いやー、この前サキちゃんが『拾ったー』とか言ってるアンタをズルズルガンガン引きずりながらこの石段を登っていったのを見たからねえ。オイラはてつきり死んでたのかと……」

「……体のあちこちに痣があったのは、ジンオウガのせいだけじゃないみたいだな」

「にゃ？」

目をそらすな、ネコ娘。

「で、こちらは雑貨屋のお姉ちゃん!!」

「こんにちはサキちゃん、今日も元気ね」

村の中腹、野菜や果実の並ぶ店先に立つ女性をサキが指さす。

黄緑色の前合わせの服に、バンダナのようなものを頭にかぶっている。

年はレイヴンより少し上といったところか。

「あら、そちらの方は……」

「ボクが付きつきりて介抱したおかげで目が覚めたハンターさんなのだ」

「百歩譲って付きつきりは認めるが、あれのどこが介抱だ」

「ああ、あの時サキちゃんが『村長さん』って言いながら引きずってた人ね」

「……たぶん俺がそうです」

「私はここで雑貨屋をやってるの。まあ、店先には野菜とかしか無いけど、回復薬や砥石みたいな狩猟用具も取り扱ってるから、気軽に声をかけてね」

「ボクも毎日のようにお世話になっているのだ」

「ハンターさんもしばらくこの村にいるなら、よろしくね」

「ああ、よろしく頼みます」

「で、ここが武器屋なのだ」

「あらサキちゃん」

今度は雑貨屋の向かい側にある店。

大剣や盾が飾られていて、奥では装備を作成する工房があった。

店にはさっきの雑貨屋の店主より少し年上の、水色の着物を着た女性
性が店番を務めている。

「このお姉さんは、お金だけで装備を売ってくれるのだ。現金至上主義なのだ」

「じらじら」

「サキちゃんの言い方には語弊があるけど、私の店では素材無しで
装備を売ってるわ。その分、強力な装備は無いけれど……」

「俺のことは聞かないんだな」

「知ってるからよ。だって数日前、そこをサキちゃんが、わんわん
な……」

「にやにやにやつ!? ストップ、ストップなのだー!!」

何故かサキが、慌てて武器屋の口を押さえた。

「それはひ、秘密なのー!!」

「はいはい、そうだったわね」

店主はニコニコしながらサキを見る。

「わんわんな……？」

「そ、それはもういいからさっさと次に行くのだ!!」

「爺ちゃんいるー？」

サキが工房の奥に向かって呼びかけると、奥から大きな鋼鉄製ハンマーを担いだ竜人族の男性が出てきた。

寿命の長い竜神族の中でも高齢なようで、白髪に皺だらけの顔をしている。

「あああう！ おう、サキちゃんけえ！ よう来たなう！ 菓子でも食ってくけえ？」

「にゃ！ 食べる！！！」

「おい、本来の目的を一瞬で忘れるなよ」

「あう？ そつちの兄ちゃんはあれけ？ 前にサキちゃんが拾ってきた奴じゃねえけ」

「俺は捨て猫同然かい……」

「この人は加工屋のじいちゃんなのだ。皮とか甲殻とか持ってくれば何でも作ってくれるのだ」

「なんでも、つてわけにはいかんがよう、持つてくりゃあ、装備をこしらえるのは朝飯前だぞう！」

「たぶん雑貨屋さんとおんなじくらいお世話になるから仲良くなつとくといいのだ」

「んだんだ。ワテも色んな装備が作れるのは楽しいけえ、頑張つてくんな！」

最後にサキに連れられてきたのは、加工屋の隣、小さな店構えの武器屋だった。

といても小さすぎる。

とても人が入って店番できる大きさではない。

そしてその小さな店の中には今、誰もいなかった。

「あれー？ いないのかな？」

「誰がいるんだ……？」

二人して店を覗き込んでいると、後ろから声がかかった。

「ブニヤウ？ なにをやっておるのだ？」

「あ、モミジイ！」

「ああ、サキだったニヤ。そっちの殿方は……」

「……レイウンだ」

サキがモミジイと呼んだのは、老齡のアイルーだった。

長いヒゲに、白毛混じりの毛並みをしている。

「モミジイはボクの親戚でね、この村にボクを紹介してくれたのだ
」

「モミジイでニヤる。この村でオトモ武具の店をやってるもんだ
ニヤ」

「親戚？」

「ニヤ。まあ、もちろん血は繋がってないニヤよ。小さい頃に面倒
を見てたんだニヤ」

レイウンはふと、サキ両親や家族は、と思ったのだが黙っておいた。

誰にでも知られたくない過去というのはあるのだから。

(過去……か)

レイヴンは違和感を覚える。

隣のサキに「レイヴンさん」と呼ばれたときの感じ。

(……?)

わからない、思い出せない。

何かを、忘れてる気がする。

「よし、最後は村長さんところ行くよー」

「え、あ、ああ……」

……とりあえずこの小娘の無駄な元気さはどうにかならんのか。

5 村長さん

サキのやたら元気な紹介のおかげで、レイヴンもこのユクモ村のことがだんだん分かってきた。

この地域一帯にみられる温泉集落の一つであり、その中でもここは最大規模の村であること。

農場や訓練所、ギルドの分所もあり、クエストも受けられること。

そして最近、ジンオウガなどの竜害によって湯治客が減っているということ。

「じゃあ最後は村長さんのご紹介なのだ」

そう言って連れられてきたのは村の中心部で、温泉の楼閣に繋がる石段を降りたところだった。

「……で、どこだ？」

「ほえ？」

きよろきよろと辺りを見回すが、村長らしき人物は見当たらない。

いや、そんな不思議そうな顔をされても困るのだが。

「あそこにいるじゃーん」

サキが指さした先、鮮やかなオレンジ色に色づいた木の下の長椅子

に彼女は座っていた。

淡紫の着物に濃紫の帯を締め、萌黄色の羽衣を優雅に纏う女性。

豊かな黒髪は大きな髪飾りと簪で留められており、丹色の飾り紐が黒に映える。

そしてその尖った耳は、彼女が竜人であることを何よりも顕著に示していた。

「あれが……村長？」

「とつても美人さんでしょ？ でもすつごく頼りになる人なんだよ」

竜人の女性 ユクモ村の村長はこちらに気が付いたようで、座ったままゆっくりと一礼した。

その礼儀正しさに釣られ、レイヴンも一礼し、村長の前に移動する。

「こんにちは、ハンターさん。ようこそユクモ村へ」

「レイヴンといます。しばらく迷惑をかけてしまったようで。それにしても……」

「なんでしょう？」

改めて目の前の“村長”を見る。

思うことは一つ。

「……お若いですね」

「おほほ……よく言われます。村長といえは本来、もっと齢を重ねた方がなるものですからね、無理ありません」

今まで立ち寄った村や街の長というのは、例外なく年配の竜人だった。

長い白鬚を蓄え、とうの昔に齢を数えるのをやめたような人。

それが村長というものだったし、実際そうだった。

「わたくしは父の座を少し早く引き継いだに過ぎません。……それはそうと、ハンターさん、お体の方は大丈夫ですか？」

「ああ、かなり回復しました。色々と世話を焼かせてすみません」

「いえいえ……私はほとんど何もしていません。そちらのサキさんがほとんどつきっきりで介抱していらしたようですよ」

振り返ると、少し得意げに、でも微かに頬を染めたサキがニコニコ顔でこちらを見ていた。

もしネコの尻尾があったらぴんと立てて褒めてもらいたがっていいそうさ。

「山道で倒れていた貴方を見つけてこの村まで運んできたのもサキさんですしね」

「聞いた話では襟首掴んでズルズル引きずってきたそうですが」

「ええ。雨の中、片手に貴方を、もう片手に貴方の大剣を持って村に帰ってきたんですよ。大泣きしながら」

今までニコニコと自分の褒められ話を聞いていたサキが、村長の最後の一言で顔色を変えた。

「……大泣き？」

「にゃ、にゃ、あ、あれは秘密なのー!!」

「あらあら、そうでしたかしら？」

『うわーん！ 村長さん！！』

『あらあら、どうしたの？』

『ぐすっ、山道で、ぐすっ、ハンターさん拾ったの……ぐすっ、でも動かないの……うわーん！』

『まあまあ、まずは落ち着いて……まだ息はありますね。ちゃんと手当をすれば治りますよ』

『ぐすっ……本当？ 死なない？』

『ええ。よく見つけてきてくれました。サキさんは偉い子です』

「……………」

「そ、そんな何とも言えない目でボクを見るなあー!!」

「……………お前は幾つのがキだ？」

「にゃ？先月で20歳になったよ」

「……………」

「な、なにさ!？」

「……………なんだこのデジャヴは」

前にも似たようなやり取りというか、状況があったような…………

『……………一応訊くが、歳は?』

『今年で22!!子供じゃないです!!』

「どっつしたの?」

「あ、いや、なんでもない。……ハタチにもなってぴーぴー泣くな。そんなズタボロな状態じゃなかっただろ、俺は」

「だってつつついても動かないし……ホントに死んじゃてたのかと思っただもん……」

そうやって少し拗ねる顔には幼さが見え隠れし、言動もあってか十代半ばくらいにしか見えない。

背丈だってそんなところだ。

「まあ、それだけ心配していたのでしょうね。最近はジンオウガなどのモンスターに襲われる村人も多くなってきましたから」

「ジンオウガ……あのモンスターか」

レイヴンを襲った四足の雷狼竜。

いくら防具を付けていなかったとはいえ、あまりにも情けないやられかただった。

そう、いきなり襲われて……

ん？

「……時に村長さん」

「なんでしょっつ？」

「俺の荷物とかは……」

「荷物、ですか？」

村長は目線を俺からサキに移す。

サキは首を横に振った。

「レイヴンは大剣しか持ってなかったよ」

「あー……やっぱり」

ジンオウガの一撃で荷車が粉碎されてたのを目の当たりにしていたし、あまり期待はしていなかったのだが。

荷物はあらかたあの谷の底に転がり落ちていったのだろう。

「大事な物でも無くされましたか？」

「大事な……物」

あの荷物は大半が生活用品や装備などだった。

まあ愛用の装備を無くしたのは痛手だが、他には……

「……………」

「どっしたの？」

何か、何かあった気がする。

大事なものが、あの中に。

無くしてはいけない、何かが。

なんだろう、思い出せない。

「……まあ、それは追々回収するからいいとして」

結局思い出せなかったが、そこで気づいたことがあった。

お金や素材やらも、まとめてあの荷物の中に入っていたということだ。

簡潔に言えば現在、まごうこと無き文無し状態である。

「……もし住むところにお困りのようでしたら、住まいをしばらくお貸ししましょう」

「いいんですか？」

「ただし……条件が一つ」

「？」

「しばらくの間だけでよいので、この村の専属ハンターになっていただけませんか？」

6 欠落情報

ゲストハウスと温泉楼（と言つらしい。あの浴場付き楼閣は）を繋ぐ渡り廊下。

温泉の湯気が立ち上る川を眼下に望む板張りのそこで、レイヴンは欄干に腰掛けて一人考える。

『しばらくの間だけでよいので、この村の専属ハンターになっていただけませんか？』

（専属ハンター、ねえ）

ユクモ村の村長に言われた言葉。

レイヴン自身、専属ハンターというものになったことは無い。

何度か話があったものの、黒火竜の討伐に東奔西走していたため全て断っていた。

しかしこの着の身着のまま文無し状態で生き延びる術が他には見当たらないのも事実である。

「レイヴン」

「……………」

「レイイーヴンー！」

「……………」

「なんでそこまで露骨に無視するのー！」

「考え事してんだ！ 耳元で叫ぶなー！」

「なにさ！ せっかく朝ご飯用意してあげたのにー！」

「朝メシ？ ……サキが？」

「……………なんでそこでそんな不安そうな顔するのだ」

「生存本能」

「ひどっ！！ ボクだっでご飯ぐらい用意できるんだぞー！」

「ほほー。ならお前の後ろでフライパンと玉じゃくし持ってるアイ
ルーはなんだ」

「……………」

「ニヤ。朝餉の用意ができましたニヤ」

「……………作れるとは言っていないもーん」

「それでき、レイヴンはこの村の「せんぞくはんたー」になるの?」

「さあな」

料理人のアイルー達の作った朝ご飯をサキとレイヴンが囲む。

スネークサーモンのマイルドハーブ焼き、ふたごキノコとミックス
ビーンスのソテー、頑固パンと熟成チーズ、クヨクヨーグルトのフ
ルーツジャム添え。

レイヴンにとっては久しぶりのきちんとした食事だった。

「いーじゃん、ユクモのハンターになっちゃえば。パンおかわりー」

「はーい」

「お前そう簡単に言うがな、いくら金が無いとはいえ行き着いた村にいきなり住みつくのは……」

「そういえばレイヴンはどこに行く途中だったのさ？ おかわりのスネークサーモンまだー？」

「あとちょっとで焼けますニヤ」

「……たしかリリアに良く途中だった」

「たしか？」

「ニヤ、スネークサーモンですニヤ」

「ありがとうー！」

「……なんでだったかな。とにかく、リリアを目指して旅してた」

「リリアって、もっと北の山の中の町だよねー」

「たしか国内屈指の大きな飛竜研究所がある町ですニヤ。ソテーはいかがですニヤ？」

「ああ、頼む」

「あー！ ボクもいるー！」

「どうしてリリアを目指していたのかがいまいち思い出せないんだが……」

「もの覚え悪いの？」

「……たぶんお前ほどではない」

「にゃ！ 失礼なー！ あ、チーズなくなっちゃった」

「お前は少し食うペースを落とせ！ そのパン何個目だよ！？」

「にゃ？ 何個目だったけ？」

「12個目ですニヤ」

「12個目だって」

「絶対食い過ぎだ」

「そーかなー？」

「いつもは10個くらいですニヤ」

「やっぱりほら、一緒に食べる相手がいると食も進むんだよー」

そう言っただけで笑うサキ。

その無垢な笑顔を見ると、何だか脱力するというか、悩んでる自分が空回りするというか。

「はあ……」

「じゃあさ、なんでリアを目指してたかを思い出すまでここに

たらしいじゃん」

パンを片手にニコニコ顔のサキ。

世の中、楽しんだ物勝ちという発想なのだろう、この娘は。

こうしていると人の事情なんか微塵も気にしてないように見えて、俺を連れてきたときは悲しみに涙を流す。

自分勝手なようで、でも悪い気はしない。

今までの自分の人生を考えると心洗われるというかなんというか。

黒火竜を追いかけ、復讐するだけが人生の目的として一人で生きてきた俺とは正反対に位置するタイプ。

そんなサキの言葉にレイヴンは苦笑いして頷いた。

「そうするか……」

しばらくはこの村にいる方がいいのかもしれない。

どうせ身寄りなど無いのだし、ゆっくりと狩りをするのもいい。

「にゃ！じゃあユクモの新しいハンターのお祝いにスネークサーモン追加なのだ！」

「食いたいだけだろ」

「はい、レイヴンの大剣なのだ」

ゲストハウスの地下倉庫。

食料の入った木箱やら素材やらが山積みになった薄暗い空間に、それは立てかけられていた。

日光の射さぬ地下、僅かな火の光を反射するその磨き上げられた刀身。

グリップの上のシリンダー機構。

確かに、自分の大剣だ。

「綺麗な大剣だねー」

「ああ……」

手に取る。

柄と刃のガタつきもなく、まるで一つの金属塊のような大剣。

「その筒は何？」

サキが指さしたのは謎のシリンダー。

ヘヴィボウガンなどに見られるような、弾薬を装填する8連装の回転筒だ。

しかしこの大剣のシリンダーは刀身と並行ではなく、斜めに刀身に向けられている。

もちろんバレル（砲身）もなければ弾がでる砲口も無い。

「なんだったかな……」

さっきから、どうも思い出せないことがいくつもある。

リリアに向かっていた理由、自分の大剣の仕組み。

そしてあの夢と、時折感じる違和感とデジャヴ。

あのモンスターの雷に打たれてから、だ。

「本当に思い出せない……」

「むー、レイヴン本当に大丈夫？ お医者さんに診てもらったほうが……」

「……大丈夫だよ。サキの言うとおり、物覚えが悪いのかもな」

ふふ、と笑って大剣を肩に担ぐ。

その感覚は慣れ親しんだものだった。

この大剣を持っていたという記憶はあるし、この大剣が自分のものだということも分かる。

ただ、この大剣をどういう経緯で手に入れたとか、この大剣はどんなものなのかだけ欠落しているのだ。

記憶の中で、そこだけ。

「そうだ、サキは何使った？」

少し心配そうなサキの気を逸らすために、違う話題を振る。

この問題はまた後で、また一人で考えればいい。

これは自分自身の問題だ。

自分で解決するに越したことはないし、そうするしかない。

「ボク？　ボクはこれだよー！」

そういつてサキは柱に立てかけられていた武器を取る。

中途半端な長さに、幅広な刀身。

それはレイヴンの見たことのあるタイプではなかった。

「その武器は一体……？」

7 ×同棲 同居 (前書き)

この回には武器に関する作者の独自解釈が盛り込まれています。
公式設定とかでは全然ないので要注意。

7 × 同棲 同居

「じゃーん」

「なんじゃそりゃ……」

「およ？ 知らないの？ スラツシユアックスだよ」

サキが構えたのはなんだか鉄板みたいな武器だった。

大剣より幅広で短い。

ギザギザの刃も相まって巨大なノコギリにも見える。

しかもその刃の先はなんかニヤニヤしたネコの顔だし。

「スラツシユアックス？ 大剣じゃなくてか？」

「ちーがーうーの！ 見てるのだ！」

そう言ったかと思うと、サキはいきなりその奇っ怪な武器を振りかぶった。

もちろんその先にはレイヴンが。

「わ、ばか、やめろっ……！」

「てっ……い……！」

咄嗟に屈んだレイヴンの頭上で刃は止まる。

そして。

「!？」

伸びた。

根元部分の刃が可動して切っ先まで瞬時に跳ね上がり、それまで刃の突端になっていたネコの顔が入れ替わるように根元へ。

刃の幅は狭まり、全長は長く。

そう、それは一瞬で立派な大剣となった。

「凄いな……」

「すごいだろー!! へへーん!!」

「剣がな」

「剣じゃないの!! スラッシュアックスなのだ!!」

「へいへい……」

なるほど、切っ先に飛び出た刃はネコの尻尾になっているというわけか。

それにしてもよくできてる。

「変形する原理は？ バネか？」

「さあ？」

「さあ、つてお前……自分の武器なんだから」

「なんかよくわかんないけど、加工屋の爺ちゃんがコレ付けて振ると、変形できるって言った」

そう言つてサキが見せたのは弓の威力添加に使われるようなガラスのビンだった。

中には透明の液体が入っていて、ビンの口にはスラッシュユアックスと接続するためのコネクタ。

「ちょっと見せてくれるか」

「ほい」

中の液体は発泡性の液体らしく、軽く揺らすとシュワシュワと泡を出した。

そしてコネクタからその気体がシュー、と緩やかに排出される。

本体の方も見せてもらつと、なんとなくは構造が理解できた。

「なるほど……この気体をこの圧室に送り込み、圧縮した気体を開放することで得た圧力で、刃を展開・保持してるのか」

「にゃ？ 難しいことはよくわかんないけど強いのだー！」

「それにしてもまあ……」

「？」

「なんともサキらしいデザインだよな……」

「でしょ？ かわいいでしょ？」

ニコニコ顔のサキを尻目に、改めてスラッシュユアックス・“グリムキヤット”を眺める。

ニヤニヤ顔のネコが俺を見返してきた。

「……ノーコメント」

「かわいいのっー！」

「そうですか、引き受けていただけですか」

変わらずに木の下で優雅に座っていた村長にそう告げたのは、もう夕方と呼べるくらいの時間だった。

どうでもいいが、この村長、一日中ここに座っていたのだろうか。

「村に新たな一員が加わるのは喜ばしいことです」

「ヨロコバシーのだー」

「それでゲストハウスのことなんです」

「うん？」

「今、この村には空き家がありません……ので、サキさんと同じ家を使ってもらうしか……」

「え、あ、え？」

「本当に申し訳ありません。つい先日、主の引っ越した空き家を使ってもらうつもりでしたが、昨日、その方が引越を取りやめて帰ってきてしまいました……」

「……それで空き家がない」

「そのとおりなのです。もともとゲストハウスが無いので……サキさんの家も元々は倉庫として使っていた使っていた建物を改築した

だけなのです」

まあ、居候的な身の上としては贅沢を言う気はないが……

一応、サキも女の子なわけで、世間一般的に男女が一つ屋根の下で暮らすことに抵抗があるうもので。

しかも俺は余所者だし、なにかこう、18歳未満お断りな心配と疑惑を持たれそうなわけで。

先住者を見て意見を求める。

「にゃ？ いいじゃんウチに住めばー」

……当の本人がコレだとなあ。

「ご心配ならずとも、私たちは貴方さまを信用しています」

にこやかな笑顔の根拠はなんですか、村長さん。

(俺だって別にサキにナンかしようって気は別にさらさら無いが……)

俺がうだうだと考えていると、サキが先に結論を出してしまった。

「よし、決まり決まり」 これからよろしくなのだ、レイヴン！

「！

「え、まあ……よろしく」

……そんなことより、俺はこのテンションと一緒に生活なんてでき

るのだろうか。

一日中こんなだったぞ、この娘。

「ニヤー、ご主人さまー。夕餉の支度ができましたニヤー」

「にゃー!! ご飯 ご飯」

ゲストハウスの入り口で呼びかけるアイルーの声に、即座に振り返るサキ。

サキが「ご飯」系の言葉に条件反射を見せるのはこの一日でよく分かった。

俺の倍は食うことも。

「ほら、レイヴンも早く行こっ」

村長の微笑みに見送られながら、キラキラと目を輝かせるサキに手を引かれてゲストハウスに向かう。

内心軽いため息をつきながら夕暮れの中、ぼんやりと考える

思い出せないこと。

それを思い出した時、俺はどうなるんだろう。

何を思うのだろう、と。

8 耳、湯煙、浴場にて。

「ふっー……」

湯に肩まで浸かると、得も知れぬ感覚が全身を舐める。

確かにサキが言ってたとおり、ここの温泉はなかなかいいものだ。

半径2m半はありそうな大きな円形の湯船。

アイルルの顔を模した巨大な注ぎ口から溢れるように出てくるお湯は微かな青色で、燈籠の明かりを受けてキラキラと光る。

時刻は遅く、浴場の向かい側にあるクエストの受付に人はいなかった。

サキから聞いたが、この温泉楼はハンターズギルドの分所も兼ねているらしい。

「……………」

満点の星空を見上げて思う。

俺はどうしてしまったのだろう、と。

この村に来てから、というかジンオウガに襲われてから何かおかしい。

思い出せない。

「パーヘリオン」

呟く。

あの大剣の名だ。

ただの大剣じゃなかったはず。

あの黒火竜を斬った武器なのだから。

あの雪山で、一人で。

なのに思い出せない。

俺はどうやって黒火竜を倒した？

どうやって見つけた？

倒して、それから？

霧がかったように思い出せない。

フルスを去って西シュレイド王国の首都に行ったのは覚えている。

そこで何をした？

どうしてわざわざ遠い首都まで行った？

……何故、思い出せない？

どれも重要な記憶だ。

昨日の晩飯とかそんなちやちな記憶ではないのだ。

あのジンオウガの雷。

あれに原因があったのだろうか。

今まで遭ったことのないモンスターだ。

そんな知らない特性があったとしても不思議ではあるまい。

……とにかく、俺は何か忘れてはいけないことを忘れてる。

「…………でも」

これだけは確かだった。

「明らかに気分が軽くなってる…………」

ここに来る前、俺の気分は沈んでいた。

一時的なものじゃなく、慢性的に。

どうして消沈していたのかは思い出せないが、とにかく軽くなっている。

「なんなんだかな、まったく…………」

額から汗が伝った。

夜の空気の冷たさで麻痺しがちだが、湯温は意外と高そうだ。
のぼせる前に……

「……ん？」

腰をあげようとした矢先、湯煙の向こうに何かが見えた。

脱衣所から出てくる人影。

まあ人のことは言えないが、こんな遅くに物好きな人だ。

(湯治客か……?)

その人影はキョロキョロしつつこちらに近づいてくる。

別に隠れているわけでは無いが、なんとなく様子を伺ってしまっ。

明かりも少ないせい、顔は見えない。

その人物は湯船に近づいて、かけ湯を……

「……？」

俺はほぼ条件反射で身を低くした。

そのままできるだけ音をたてないように湯船の端っこへと……

「誰も……いないよね？」

人影の正体はサキだった。

胸元あたりから手に持ったタオルで隠してはいるが、そのしなやかで白い肢体はほとんど晒されている。

湯気にあてられ、ほんのりと桃色に上気する肌はなんとも艶めかしく……

(いやいやいやいや！！ 相手はサキだぞ！？ ともすれば男に見えるような！！)

というよりこの浴場は混浴なんだから別に俺の身は潔白なんだが……

良心が咎めるといっつか、どことなく後ろめたいといっつか。

(っっーかちゃんと隠せよ!?)

タオルを巻きつけているのではなく、ただ胸元あたりで持つてるだけ。

いや、まあ大事なトコは隠れてるんだけどもさ。

「あつ……」

サキはといえばこちらには気がついていないらしく、足先でチョイチョイとお湯をつついてる。

熱いお湯は苦手なのだろうか。

やがて意を決したようにちやぶん、と片足を入れる。

それからおっかなびっくりにもう片方の足も湯に入れた。

立ち込める湯気でよくは見えないが、音から察するにゆっくりとこちら側に近づいてきている。

(や、やばいか……?)

なんとかしてサキに気付かれないように浴場から脱出せねば。

……裸で添い寝する娘に羞恥心があるかどうか疑問だが、世間体の話である。

混浴、だけれども。

(こつこつというリスクは冒さないに越したことはない……と、あれ?)

低く屈んでいた姿勢から少し上体を上げたその時、一瞬だが平衡感覚がぶれた。

(やば、のぼせて……!!)

一度崩れた姿勢を戻すには、重心を取り直す必要がある。

具体的には傾いた方向に足を踏み直す。

そんな些細な行為だが、ここはお湯の中。

否が応にも音は鳴る。

ちやぷん。

「ひあッ!？」

サキの素っ頓狂な声。

やばいと思って焦ったのがまずかった。

ばっしやーん!!

……派手にすっ転んだ。

「にゃあああッ!？ だ、誰!? 誰がいるのだっ!？」

体が沈むほど温泉は深くない。

ただのぼせ気味だったこともあり、すぐには立ち上がれず。

もうもうと立ち込める湯けむりの中からサキが現れた。

「れ、レイヴンっ!？」

前述したようにサキは裸同然。

が、俺はある一点に目が止まった。

そのほっそりとした白い太腿より。

有るか無いかギリギリの胸の膨らみより。

俺が見たのはサキの頭。

その、水分を含んだ艶やかなショートヘアの中から“生えて”いる
“モノ”。

「あ、あわわ!! こ、これはね、違うんだよ!?! あのね、その、
えつとね!?!」

「……………ネコミミ?」

俺の言葉に、サキの“耳”がピクンとはねた。

9 ネコミミ事情

「……………ネコミミ!?」

「わっー!! 違う違う、気のせいだよ!! そんなの生えてないよ!?!」

「わっー!? 前隠せバカ!! 頭よりまずそっち隠せバカ!!」

「ふわっ!? でもでも耳が耳が!!」

「隠す優先順位そっちが上なの!?!」

「ね、ネコミミなんて生えてないよ!? レイヴンの見間違えだよ!?!」

左手で頭、右手のタオルで体を隠すサキ。

俺もいろいろ焦るが、サキはもっとパニックに陥っていた。

「と、とりあえず俺は後ろ向いとくから、お湯に浸かれ!!」

「う、うん」

俺が後ろを向くと、控えめなちゃぶん、という音がした。

「っ、浸かったよ」

「まったく……」

振り返ると、体操座りでお湯に浸かるサキが真っ赤な顔で、上目遣いにこちらを見ていた。

農夫のように頭をタオルで隠している。

が、その少し尖った三角形の耳はタオルの上からでもよく分かった。

「ふにゅ〜……」

「……………」

「あの、その、レイヴンがいるなんて知らなくて……」

「ネコミミ」

「え？ な、なんのこと？ ネコミミなんてボク知らないよ？」

「とじゅ」

「にゃっ！…？」

タオルの上からその耳を掴んでみる。

厚さといい、血の通う温もりといい、完全に獣の耳だ。

「えいえい」

「にゃ、にゃ、くすぐりたいよ〜！…」

「本物が……」

ばっ、とタオルを取り上げてみる。

そこには、艶々とした黒髪の中から対になって生えている黒いネコ
ミミが。

「ああ、た、タオルー!!」

「ただの人間じゃないのか」

その言葉にサキがビクッと身を震わせる。

タオルを取り返すのを諦めて、少しもじもじとしながらサキは言っ
た。

「モミジイが言うには……ボクは“あじゅーじん”なんだって」

「なんか宇宙人みたいだな。亜獣人か」

この世界には様々な種族の生物が存在している。

その中でも亜人と呼ばれる人々。

身近な例を上げれば村長のような竜人などだが、人類とは僅かに種
の系統の異なる人々がいる。

それが亜人と呼ばれる人々。

そして、より動物やモンスターに近いのがアイルーやチャチャブー

のような獣人種。

彼らは容姿こそ獣然としているが、知能は人間と同等であり、よく知られるように人間社会に共生するものも多い。

「だが“亜獣人”というのは初めて聞く言葉だな」

「ボクも難しい話はよくわからないけど……見た目や寿命なんかは人間なんだけど、獣人の血が混ざった種族なんだって」

「ほほー」

まあ広い世界、そんなのがいたって別に不思議ではないだろう。

殊ににこんな辺境では。

「あの、だから……」

「ああ」

「ボク、人間じゃないんだよ、ね……」

「かもな」

「その……隠しててごめんなさい」

そう言うとサキは申し訳なそうに視線を外した。

ネコミミはペタンと寝てしまっている。

「別に怒っちゃいけないけどな」

この世界に生きていれば、いろんな種族の人と出会う。

竜人はもちろん、成人しても腰くらいまでしか無い種族、水かきを持つ種族、鼻が無い種族なんてのもいた。

そんな世界で、ネコミミが生えてるだけで珍しがることもないだろう。

「でも、でも、ボクは竜人さんみたいに長生きもしないし、物知りじゃないし、鼻が利くわけでも耳がいいわけでもないのに、ミミだけケモノなんだよ……？」

その言葉は、自分は人間ではない、というニュアンスを暗に含んでいた。

おかしい。

こんな地方に住んでいて、亜人だの獣人だのとこだわるのは。

普通に亜人を見る機会が多いだろうし、彼らは彼らでごく普通に社会に溶け込んでいるはずだ。

サキ自身に何かあるのだろう。

自分が完全な人間でないことにこだわる理由なり原因なりが。

でも、俺がその領域に踏み込むのは違うような気がする。

だから。

「いいんじゃないか？ 可愛いし」

そう、言うだけにとどめた。

それが互いのためと。

「かわ、いい？」

「ああ。だからそう、ぺたっーとネコミミ寝かすなよ」

「う、うん……」

消え入りそうな声で、サキは体操座りのまま頷いた。

嬉しそうな顔を隠しもせず。

分かりやすいところもまた可愛いヤツだ。

「なにニヤニヤしてんだか」

「に、ニヤニヤなんかしてないよっー!!」

「んなことより、真っ裸で男と向き合ってることに何か反応は無いのか」

「？」

「きゃー、とか、えっちー、とか」

「え？ 別に？」

あっけらかんと答えるサキ。

……ネコミミの時はコイツあんなに騒いだくせに。

基準がわからん。

「……亜獣人どうのより、あなたはまず女性としての恥らいを身につけてください」

「別に見られて困るわけじゃないしな」

「困るんだ！！ 俺が！！」

「なんで？」

「こつ、目のやり場にこまるといっかなんといっか……べ、別にっ
るぺた好きとかじゃないんだからなっ！？」

「わー、 “ つんでれ ” さんだねー！！」

「さーっと遠回しに俺をロリコン扱いするなー！……」

「あれ？ ボクも何かぶじょくされた気がする………？？」

「気のせい、気のせい」

「まーいっかー。ところでレイヴン？」

「なんだ？」

「だいじょぶ？」

「……え？」

なんだかぼやけたネコミミ・サキの笑顔を見たのを最後に、ぐにやりと歪む視界。

ざぱーん。

「にやにやつ！？　ね、レイヴン！？」

のぼせてぶっ倒れた俺は、サキに部屋まで運んでもらうハメになった。

……これからは長湯はほどほどにしよう。

10 ネロミミ先輩ハンター

朝。

レイヴンは日の出と共に目を覚ました。

日が昇ると同時に動き、日が沈むと同時に行動を止める。

慣れない土地で日没後に動くのは危険なので、太陽が空にある間の時間を最大限に使ったためだ。

それが旅の基本である。

そしてそれは体内時計にしっかりと組み込まれていた。

(……ユクモ村、だっけ)

自分がベッドの上、屋根の下に眠っていたのを確認し、「ここがどこかを思い出す。

まあ大変なことになったが、それほど深刻にも受け止めていない自分。

むしろ、ジンオウガに襲われる前より好転した気分。

不可解だ。

(……実に不可解だ。こっちも)

そう言ってくるりと顔を横に向ける。

すーすー寝息をたてる同居人。

……昨日の夜は床で寝てたくせに、夜中にこっそりと忍びこんできやがった。

気付かないフリはしといたが、雷に打たれて眠ってた時と違って、こちらもさすがに気付く。

耳元で大声でも出してやるうかと思った時、ふとあることが気になった。

(……ネコミミは?)

昨日の夜、温泉で見たネコミミ。

そういえば、昨日の日中はそんなもの頭に生えてなかったように見えた。

数秒悩んだ末、すっ、とその柔らかな髪をなでてみた。

手櫛で梳くようになでるが、昨日のあった位置にネコミミは無い。

(……?)

「……ネコミミはね」

眠っていたはずのサキの声に、レイヴンは驚いて手を止める。

サキの瞼は閉じたまま。

「水に濡れた時しか現れないのだ」

そう言っつてサキは目を開け、にこやかに笑いかけた。

「おはよ、レイヴン！！」

「……………」

「む、朝の挨拶はちゃんとしなくちゃいけないのだ。お・は・よ、レイヴン！」

「とりあえずオハヨウ」

「ん、おはよう！！」

「で」

「にゃ？」

「どうして勝手にベッドに上がり込んでんだこのネコ娘っ！！」

「にゃっ！？」

「アオアシラ？」

「レイヴンはアオアシラも知らないの？」

「……うるさい」

村長が「お二人に依頼したいクエストがありまして」と言って、サキと俺に告げたモンスターは俺の全く知らないものだった。

朝から早々、ゲンコツを食らったサキが村長より先に得意げに語り出す。

「アオアシラはね、おっきい熊さんなのだ」

「村の近くの渓流に住むモンスターでして、別名・青熊獣。鋭い爪と厚い甲殻を持っています」

「こっ、ガオッー！！ ドタドタドタターって走るのだ！！」

「ハチミツが好物でして、ハチミツ採取に行った村人が度々襲われているのです」

「でもね、ハチミツ食べてる時は意外と可愛いんだよー」

「昨日も一人、襲われかけまして。また怪我人が出ない内には是非ともお二方に狩っていただきたくて」

「分かりました。肩慣らしついでにやってみましょう」

「うがっー!! レイヴンってばボクの話は聞いてないのだー!!」

「聞ってる聞ってる。10対0くらいの割合でサキの話も聞いてたぞ」

「ボクが10？」

「村長が10」

「やっぱり聞いてないのだー!!」

「くすくす……ではお願いしますね、サキさん、レイヴンさん」

ガーグアの曳く車で一時間ほど。

二人はクエストの開始地点、ベースキャンプを張る場所に到着した。

キャンプを設営し、装備を整える。

「ほー、緑豊かって感じだなあ」

「……………」

「水もふんだんで、いい土地じゃないか」

「……………」

「サキー？」

「なに」

「なにをそんなむくれてんだ？」

「レイヴンってば、ボクのこと子供扱いしすぎなのだー!!」

「んー…………」

だって体はともかく中身は子供だろ。

とは口には出さないが。

「ここではボクの方が先輩なのだ!! モンスターのことだって知ってるの!!」

「あんな擬音語説明じゃあなあ……」

「ふん、今に見てるのだ!!」

そう言っただけで装備を着ていくサキ。

青い甲殻と、白い獣毛素材で作られた装備で、両の肩当てを留める赤い紐が胸のところであくセントになっている。

「それ、アオアシラの装備か？」

「そうだよ？ アシラシリーズなのだ」

「ちょっと失礼」

「？」

サキの胸装備を覆う青い甲殻をコンコンと手で叩いてみる。

硬さだけで言ったらイヤンクックより軟らかそうだ。

ただそれだけ柔軟性に富むということであり、打撃系の攻撃は衝撃を受け流されやすそうではある。

「……もういい？」

「ああ。……だから何をそんなにむくれてんだって」

「…………ふん」

ふい、とそっぽを向くサキ。

…………お姫様のご機嫌斜めはなかなかしぶとくて。

だがアオアシラと戦ってる時に流れ矢ならぬ“流れ刃”をぶつけられてはたまらない。

「…………えい」

「にゃにゃ!? な、なにすんだレイヴン!?!」

俺はモンスターの胃でできた水筒の水を、ぴゅ、とサキにかける。

案の定、サキの頭に例のネコミミが現れた。

「にゃ、にゃ!? み、ミミが、ミミが!?!」

わたわたと慌てて頭装備をかぶるサキを見て笑う。

そして頭装備の上からグリグリとサキの頭をなでた。

「はははっ。サキはやっぱりそうやって賑やかな方が可愛いな。さっきのことは謝るよ」

「む、むー。まあボクも悪かったのだ」

「そうやって素直なところも可愛いな」

「も、もう!! 早く行くのだった!!」

そう言っただけの猫顔スラッシュアックスを肩に担ぎ、ズンズンと歩き出すサキ。

少し頬は紅潮し、口はへ字のままだけどとりあえず少しは機嫌が直ったようで。

まあなんと分かりやすい。

後ろ姿を追いながらふと、こんなパートナーもまた悪くないと思う。

パートナー。

「パートナー……ねえ?」

「何してるの? ついてくるのだ!!」

「あ、ああ」

……パートナー、ねえ。

反響。

どうしてだろう、こんなにこの言葉に引っかかるのは。

11 青熊獣発見

ベースキャンプを出発してから数分、雷光虫をついばむガーグアを見つつ、サキとレイヴンは岩山の斜面にあたるエリア2に差し掛かった。

「ん？ 何かいるぞ」

「え？ ああ、あれはジャギイなのだ」

少し離れたところに、二足歩行のトカゲのようなモンスターが数匹いた。

身の丈は人間と同じくらい、体色は紫とオレンジで、頭にはエリマキのようなものを備えている。

見たところランポス種とさして代わりないようで、近縁種なのかもしれない。

「ああ、そういえば始めの日に聞いたな」

ジャギイはこちらを視認するやいなや、エリマキを全開にし、鳥竜独特の声で鳴き始めた。

三匹がトタトタとこちらに走ってくる。

「無視するか」

こういう類の雑魚モンスターは相手にしているとキリがないし、仲間

を呼ばれると厄介極まりない。

麻痺や毒などの状態異常攻撃を持っている種など、相手にするだけでも精神衛生上よろしくない。

しかしサキは違ったようだ。

「……久々の狩りだから、ちょっと準備運動するのだ」

「は？」

サキはそう言ったかと思うと、向かってくるジャギイに向かって走り始めた。

グリムキャット、抜刀。

三匹が攻撃圏内に入ったその瞬間、右足を強く踏み込む。

そしてその右足を回転軸に、反時計回りに体を捻り回転。

回し蹴りの要領で素早く、なお且つ勢いを乗せたまま回転しつつ、右肩に担いだグリムキャットを下段に。

「とりゃああああ!!」

そして左足を前に勢い良く踏み込み、遠心力で加速したグリムキャットを下段から思い切り振り上げた。

断末魔を引きずりながら、紫とオレンジの肉塊が三つ、空高く舞い上がる。

落ちる。

ピクリとも動かなかった。

「どうだー!」

「いや、どうだとか言われても」

「ドヤア……」

「どや顔されても」

「すごいでしょ、すごいでしょ!」

「まあ並のハンターくらいの腕はたつみたいだな」

「むー、辛口なのだ。あ、もしかして素直になれないだけ？ やっぱりつんでれさんなのだ」

「そのポジティブシンキングさを少し分けていただけませんか」

「あれか？」

「あれだよん」

さらさらと流れる涼やかな溪流の浅瀬の流れの中、水面を見つめる熊が一頭。

青い背甲に、鋭い鉤爪、ずんぐりむっくりな巨体を緊張させて流れをにらんでいる。

青熊獣、アオアシラ。

溪流地帯に棲む大型モンスターであり、さつき華麗に空を舞ったジヤギイより格上のモンスターだ。

「……………なにやってんだ？」

サキとレイヴンは岩陰に身を潜め、アオアシラに視線を向けている。

視線の先には川底がはつきり見えるような澄んだ流れ。

微動だにしない。

屈んだレイヴンの頭の上にあごを乗せたサキが言った。

「あれは……お魚を待ってるんじゃないかな？」

「魚？」

「サシミウオとか。……おいしそう」

「俺の上でよだれ垂らすなよ」

「し、失礼なのだ!!」

「じゃあ口元をあわてて拭うな」

「そ、それよりほら!! アシラが魚とりそうだよ!？」

サキが指差した通り、それまでじつと水面を見つめていたアオアシ
ラが右前足をゆっくりと振り上げた。

そして次の瞬間。

ブンッ!!

風を切る音と共にその剛腕が水面を高速でえぐった。

日の光を反射した水飛沫が華やかに散る。

そしてその中に。

「わあ
」

1尾のサシミウオが宙を舞っていた。

サシミウオの細い体がキラリと光る。

「お、お魚!」

「え、あ、おい、ばか」

サシミウオを見た瞬間に、レイヴンの後ろにいたサキが岩陰から飛び出す。

条件反射。

その言語が相応しいほどのスピードで溪流に飛び出すサキ。

そしてアオアシラの獲物が川縁に落ちる前にキャッチした。

口で。

そして溪流に足を突っ込んだことで、頭装備からびよこんとネコミミが飛び出す。

アオアシラ。

サキ（ネコミミ付・サシミウオ付属）。

止まる時間。

流れ続ける渓流。

サキにくわえられ、ぴちぴちと跳ねる活きの良いサシミウオ。

アオアシラとサキの視線がぶつかった。

ウガッー！！

獲物を横取りされて吠えるアオアシラ。

「しゃっー！！」

魚をくわえたまま器用に唸るサキ。

同レベル。

「馬鹿かおまえは」

ケモノとケモノの睨み合いはやがて獲物争いになる。

アオアシラが後ろ足で立ち上がり、威嚇行動をとったかと思うと、水を蹴立てながらサキに突進をかけた。

サキもグリムキャットを構える。

サシミウオをくわえたまま。

獲物を賭けた真剣勝負が今始まる！！

「……なんだかなあ」

レイヴンはため息を吐き、パーヘリオンを担いでのろのろと岩陰から出陣した。

ウガッー！

しゃっー！

「ケダモノどもめ……」

12 ソロハンター×2

アオアシラvsサキ・レイヴンの戦いは始まって数分が経っていた。

2対1なのだから当然ハンター側が有利……のはずなのだが。

「はっ!!」

横殴りに斬りつけたパーヘリオンを、アオアシラは素早く下がってかわす。

その隙を狙ってサキがアオアシラの懐に入り込んだ。

だがレイヴンにとって、サキが入り込むのは予想外。

次の攻撃動作に入っていたレイヴンは慌てて叫ぶ。

「わ、バカ!! 伏せる!!」

「にゃ!?!」

渾身の力を込めて振られる大剣は、攻撃動作を中断することができない。

サキはパーヘリオンの風切り音を聴いて反射的に頭を下げた。

すんでのところを鋼の刃が通過する。

「あ、あ、あ、危ないのだ!!!!!!」

「お前がちょこまかと突っ込んでくるからだろうが!!」

「レイヴンがなんにも考えずに振り回すのが悪い!!」

「お前だってブンブン振ってんだろっ!!」

「ちゃんとレイヴンには当たらないように振ってるのだ!!」

「嘘つけ!! 2、3回かすめたぞ!？」

「当たってないでしょ!!」

「じゃあ今の俺のも当たってないからノーカンな」

「卑怯なのだ!!」

「自分のこと棚にあげといてよく言っ!!」

「レイヴンだってレイヴンだって!!」

「わっ!! 後ろ、後ろ見るバカーっ!!」

「バカっていうなーっ!!」

「うーしーろっ!!」

「わっ!! アシラが怒った!？」

「あーもうっ!! とりあえずあのクマ片付けるぞ!!」

「ボクが倒すのだーっ!!」

「だから突っ込むなっつってんだろーが!! ばかああ!!」

「にゃあああ!!」

「……あらあら、苦戦したようですね」

夕方、もう陽も沈みかけた頃に二人はユクモ村に帰ってきた。

装備を担いだ二人を見た村長が、出発したときと変わらずに木の下で優雅に二人を出迎える。

しかしその二人の有様は。

「……………」

「……………」

泥だらけで顔や腕にはかすり傷がいくつも見え、二人は揃ってムスツと押し黙っていた。

レイヴンは討伐完了の印が押されたクエストの契約書を渡し、一人でゲストハウスに歩いて行く。

「あらあら……………」

そんなレイヴンを見送り、村長は残されたサキを見る。

「何があったのか話してくださいね？ サキさん」

ユクモ村に立ち込める湯煙を、夕日が淡いオレンジ色に染める中。

サキはうつむいたまま口を開いた。

「いつつ……」

すり傷にお湯が滲みる。

誰もいない夜の浴場。

今日はなかなかひどい目にあった……

あのアオアシラとかいうモンスター自体はさして強い部類ではない。
まあ大型の鳥竜とトントンか、それに毛が生えた位。

それより問題は傍らでグリムキャットをぶんぶん振るっていた猫娘だ。

俺がすぐ隣にしようがお構いなしに剣を振り回すわ、予告もなしに閃光玉投げるわ。

おかげでこっちは攻撃を積み掛けることもできないし、隙を突こうとしても邪魔される。

たかだかあのレベルのモンスターに、あんなに時間をかける羽目になった。

「ったく……」

タオルを頭に乗せ、ふう、と息を吐く。

岩にもたれかかって天井を見上げる。

「やっぱり村の専属ハンターなんて安請け合いするもんじゃなかったな……」

「そうですか？」

「う、わ、わ、わ!？」

突然の応答に驚く。

それが女性の声なので尚更。

「あら、驚かせてしまいましたね」

「そ、村長か……」

浴場と集会所を隔てる丹塗りの欄干、村長は物腰も優雅に腰掛けていた。

……いつの間に。

「歴戦のハンターさんなら安心して頼めると思いましたが」

「ん、いや、クエストの難易度自体に問題はないんですが」

「そうですね、それはなによりです」

「どうもサキと一緒に、ってのが」

「あら、今まではずっとお一人で？」

一人。

「……ええ、たぶん」

「たぶん、ですか？」

「ああ、いや、そうですね」

「それならば苦労はするかもしれませんがね……今日のクエストで何か？」

「ええ、まあ」

村長に今日のクエストの一部始終を話す。

村長は話の途中で口をはさむこと無く、頷きながら話を聞いてくれた。

「……まあ、という具合にサキに好き勝手やらねまして」

「そうでしたか……」

村長は静かに頷き、そして欄干から腰を上げた。

羽衣をふわりと羽織りなおす。

そしてこう言った。

「レイヴンさん、貴方の話はよく分かりました。貴方が正しい部分もあると」

「ええ」

「ただ……これだけは忘れないでください」

俺に背を向けたまま。

優しく諭すような口振りで。

「あの子……サキさんはずっと一人で狩りをしてきた、ということ
です。ずっと」

それはサキからも聞いた。

でも、村長が言いたいことはそうではない。

言葉通りの意味じゃない。

違う。

「歯車は噛みあって、初めて力を生み出す物ですから。お互いに、
お互いの力を受け渡しあって」

そう言っつて村長は去った。

歯車、ねえ。

「……また、のぼせてきたかな」

のぼせる前にお湯から上がろう。

今日は引っ張り上げてくれるヤツもいないし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0004r/>

陽炎の狩人～F.M.N.～

2011年10月8日18時14分発行